

平成31年度 洛央小学校 学校経営方針

学校教育目標 学びの広がり, 深まりとつながりのある学校

～他者と協働し, 学び合う子の育成～

子どもたちが生きていくこれからの中は、様々なグローバルな課題に対し、持続可能な社会が創造できるような新たな価値観や行動が求められる時代である。今こそ、子どもたちが「生きる力」を身につけ、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟かつ逞しく対応し、社会人として自立していくことができるようとする教育が必要であると考える。

広がり・・・地域ぐるみの学校づくりをすすめ、学校が地域に発信、広げていくこと
思考力・判断力・表現力を身につけ、豊かな人間性を育むこと

深まり・・・様々な体験活動や問題解決のプロセスを通して、自分の考えと友だちの考えを比較し、共通点や類似点、相違点を伝え、話し合い、深めること
さらに、話し合ったことをもとに自分の考えを見直し、再構築すること

つながり・・・学びの「広がり」「深まり」をつなぎ、他者と協働し、学び合う子を育成すること
意図的・計画的・積極的・継続的・発展的な取組を工夫すること

協働

- ・目標を明確にする
- ・目標を共有する
- ・実現に向けて力を合わせる

協働=組織力

目標達成のために
単独では達成できないことを
協働によってものごとを達成する力

また、学校教育全般において以下を重視する視点として教育活動に臨む。

・カリキュラム・マネジメントの視点の下、PDCAを意識し、教育活動に基づき、組織的かつ計画的に日々の教育活動の質の向上を図り、子どもの姿や地域の状況に応じた創意あふれる取組を展開する。(平成31年度 学校教育の重点より)

めざす子ども像

心やさしく すこやかに 大きな希望を胸に抱く子

「めざす子ども像」…単に自分が将来就きたい職業にこだわらず、「こんな人になりたい」という生き方も含めた大きな希望（“夢”や“願い”）を抱き続ける子を目指す。

心やさしく・・・・心と力を合わせることに喜びを感じる子
・思いやりをもって接する子

・自己肯定感や自尊感情を育み、互いに認め合う子

すこやかに・・・・進んで運動し、元気で活力のある子
・最後まで粘り強く取り組む子
・偏食せず、丈夫な体をつくる子
・安全に対する意識を高く持ち続ける子

大きな希望を胸に抱く子・・・
・学びを人生や社会に生かそうとする子（学びに向かう力・人間性の涵養）
・未知の状況にも対応できる子（思考力・判断力・表現力等の育成）
・よりよい自己を創造できる子（生きて働く知識・技能の習得）
・夢や願いを抱き、実現にむけて長期的な展望をもつ子

＜洛央教育の重点＞

何ができるようになるか

*言語活動を通して「主体的にコミュニケーションを図ろうとする子」を育成する

児童が「話したい」「聞きたい」と思えるような言語活動を行う中で、友達の気持ちを推測しながら聞いたり、伝え方を工夫したりすれば「よりよくお互いの考え方や気持ちを伝え合うことができる。」という感覚をつかませる。

そのような経験を積み重ねることを通して、「なんとか伝えよう！」「なんとか友達の考え方を理解しよう！」と主体的にコミュニケーションを図ろうとする子を育成する。

*規律ある生活習慣・・・・・・存在感や成就感を味わえる学級集団づくり・家庭学習への働きかけ

一人一人を認め、個々の個性が生かされる中で、友だちも自分も大切にする学級・学習集団づくりを進める。

規則は自分を守り、他を大切にするためにあることを自覚させ、規範意識の醸成を図りたい。また、問題の早期発見・早期対応を心掛け、校内で報告・相談するなど情報の集約と共有を徹底し、迅速かつ組織的に指導する。さらに、家庭学習への働きかけをすることにより家庭と学校の関係づくりの定着を図るとともに、家庭での学習は家庭で責任をもってできるようにする。また、子どもたちが計画的に家庭学習をしたり、改善を図ったりすることができるようとする。

*地域ぐるみの学校づくり・・学びを人生や社会に生かそうとする

「洛央いきいきコミュニティ」を核として学校・家庭・地域の連携を図り、地域の伝統的な文化や産業、あるいは人を教材化した体験的な学びの展開を大切にし、先のような学習を展開することで、地域に愛着を感じ、地域の次代を担う子どもを学校・家庭・地域の連携の下で育む。また、学年に応じた地域学習の推進を図り、さらに、高学年になるにつれて様々な生き方について学ぶ機会をもつことで、今、学校で学んでいることと将来とのつながりについて考えたり、具体的な目標がもつたりすることを目指す。

総合的な学習の時間のカリキュラムを見直すことで、社会と連携・協同しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む。

*「豊かな心」を育む活動の推進

「豊かな心」を育む活動を推進し、人権文化の担い手となる子を育む。全ての児童に系統的な人権教育の推進を通して、豊かな人権感覚を育て、実践的態度を培うための取組を推進する。

本年度も火曜日の1校時を全校道徳の時間と設定し、「自分を高める力」「ともに学ぶ力」を意識し、自らの変容に気づくことができる子どもを育てていく。また、カリキュラムを作成し、資料・自己評価等を残すことで評価に結び付けていく。

どのように学ぶか（主体的・対話的で深い学び）

*主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育成するための授業改善

主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育成するためには、児童が活動の目的や意図を理解し、見通しをもって取り組むことが大切である。また、お互いの考え方や気持ちを伝え合う中で「わかった」「できた」という成功体験を数多く積むことが大切である。

そのために、以下の（1）～（6）の研究項目は大切なポイントである。これらの項目を軸に授業を実施し、事後研究会を行うことで、主体的にコミュニケーションを図ろうとする子の育成を図る。

研究項目

- (1) コミュニケーションを行う目的や場面、状況等の明確化
- (2) 言語活動を理解する活動の充実
- (3) 指導者と児童のやり取りの充実
- (4) 児童同士のやり取りの充実
- (5) Small Talk の充実【高学年】
- (6) 系統性のある「読むこと」「書くこと」の指導の充実【高学年】

*チーム学習による創造的な学び合い

チーム学習とは、自立した個々のメンバーが学習の目的や見通しを明確に共有し、試行錯誤したり、お互いに考えを練り上げたりしながら非定型な問題を解決していくような学習形態である。チーム学習が成立するには「子ども主体の学習問題が設定されていること」「チームで目指すべきゴールが明確であること」「ゴールに向かう道筋は一つではないこと」「試行錯誤できる場と時間が確保されていること」などの条件があげられる。このようなチーム学習を通して、子ども同士のかかわり合いの中で自己の考えを広め、深める「対話的な学び」の実現を図る。

何を学ぶか

*教科などの教育と社会をどうつなぐか

各教科等で育む資質や能力を明確化し、ねらい（目標）やまとめ（結果）を板書すること。単元のおわりには、自己評価や振り返りを行うことで、次の学びにつなげるとともに、学びをどのように社会につなげていくかを考える。

指導者は各教科・領域のみならず、学校行事やあらゆる教育活動でどのような力を育てるために取組を行っているのかを明確にし、子どもたちに、どのような力がついたのかを意識することが重要であると考えている。

*外国語活動の取組について

児童の実態と新学習指導要領の趣旨を踏まえ、「お互いの考え方や気持ちを伝え合う活動を通して主体的にコミュニケーションを図ろうとする子の育成」と設定し、新学習指導要領の目標に示された資質・能力の育成にせまる言語活動を重視した授業の在り方について研究を深める。

①研究実践の充実

全市公開授業を実施する。

1～6年生の授業実践及び校内授業の充実を図る。

②教科化を見据えた取組の実施